

成蹊大学教授 野口 雅弘先生 受賞コメント

このたびは、櫻田會奨励賞という素晴らしい賞をいただきましたことを、本当に光栄に思っております。長年にわたり日本の政治学研究をサポートしてくださっている櫻田會の皆様、そして今回審査を担当してくださった中邨先生はじめ審査委員の先生方に、心より御礼申し上げます。ありがとうございました。

今回、賞をいただきましたのは、拙著『マックス・ウェーバー：近代と格闘した思想家』（中公新書 2020 年）です。ウェーバーは、1920 年にスペイン風邪と思われる病気で命を落としました。本書は、それからちょうど 100 年後に当たる 2020 年に、新型コロナウイルス感染症が蔓延するなかで出版されました。

没後 100 年というメモリアル・イヤーに合わせたこの新書に、私はある書き方をすることによって特徴を持たせようと思いました。その書き方とは、日本におけるウェーバーの受容、あるいは受容史(Rezeptionsgeschichte)に力点を置くというものです。「正しいウェーバー理解」が大事であることはいうまでもありません。しかしそれと同時に、「ウェーバーがなぜ、どのように読まれてきたのか」に光を当てようと思いました。

人が何かに引き寄せられ、それについて考えるようになり、それを研究対象にするとき、そこには何らかの「問題意識」、あるいは「時代の課題」があります。時代が変わり状況が変われば、まったく同じテキストでも読み方が変わってきます。私が試みたのは、ウェーバーの受容について、そして受容の変化と積み重ねについて考察することで、彼の仕事を立体的に描き出すことでした。

ところで、櫻田會のホームページを拝見しましたところ、第 1 回の櫻田會賞は 1983 年で、受賞作品の一つは藤田省三の『精神史的考察』でした。藤田はこのなかで、高度経済成長後の「経験」の喪失について論じています。もちろん、ずっと低成長の続く時代を生きている今の学生にとっては、高度経済成長は神話の世界の昔話かもしれませんし、それは高度成長以後の世代である私にとってもそれほど変わりません。しかし、藤田が述べていることは今も古びていません。毎日新しいニュースや情報がどんどん入ってきて、新しい人や理論が紹介され、たくさんの刊行物が出ています。しかも藤田の時代以上に、今日ではこのペースは速くなっています。SNS 上の話題は本当に短いスパンで推移していきます。藤田は、このような状況のもとでは、要領のよい議論の整理や「まとめ」はできても、「経験」をすることが困難になっているといえます。ここでの「経験」とは、「物事との驚きに満ち又苦痛を伴う相互交渉」（『精神史的考察』）のことです。

私がウェーバーの受容史という形で書こうと試みたものは、藤田のいうこの「経験」と重なります。マックス・ウェーバーのテキストが、この 100 年間、日本の研究者によってどのように「経験」され、いかなる政治的な理念や意識や議論を生み出し、それがどのように変化してきたのか。そしてその変化を、「流行」の問題としてではなく、それをもとにして人がものを考える「経験」のレベルでどのように捉え返したらよいか。藤田省三の『精神史的考察』の読者として、私にはこの点にこだわりたいという思いがありました。拙著はそうしたささやかな試みの産物です。その試みがどのくらい成功しているかはわかりませんが、第 1 回の受賞作が『精神史的考察』である櫻田會賞の奨励賞を、まさにこの本でいただくことができたことは、私にとって本当に嬉しいことです。

第 1 回の櫻田會賞についてもう少しだけお話することをお許してください。この年の受賞者は三名でした。一人は既に述べました藤田省三。私にとってとても重要な思想家です。二人目が『ヘーゲル政治哲学講義』で受賞した藤原保信。私が政治思想の研究者になろうと思ったのは、早稲田で彼の講義を聞いたからでした。驚きと苦痛を伴うその「経験」がなければ、私は研究者になることはなかったでしょうし、当然、今この場所にいることもありませんでした。そして、もうお一方が論文「震災復興の政治学」で受賞された、今回の審査委員長でいらっしゃる中邨章先生でした。先ほど中邨先生から賞状と記念品をいただく際、櫻田會賞の伝統を思い、そのズシリとした重みを感じながら受け取らせていただきました。

この重みを私なりに受け止めながら、日本の政治学研究の発展に微力ながら貢献できますよう、引き続き努力してまいり所存でございます。以上、私のご挨拶とさせていただきます。本当にありがとうございました。